

富山大学人文学部同窓会会報

人 文

No. 28

2006. 10. 1

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電 話 (076) 445-6143

F A X (076) 445-6141

題字 大島文雄先生



国民大学校（韓国・ソウル）との国際交流

韓国ソウル市中心部の北側、北漢山国立公園の中という恵まれた場所に位置する国民大学校は、朝鮮半島が植民地支配から解放されて間もない1946年に、申翼熙をはじめとする上海臨時政府の要人たちによって設立された、歴史ある私立大学の一つである。（上写真：緑豊かな国民大学校キャンパスと申翼熙の像）

富山大学人文学部と国民大学校社会科学大学が2000年に締結した学部間協定は、2005年から大学間交流へと拡大され、交換留学制度や研修旅行を通じて毎年多くの学生が互いの社会や文化について学び、国境をこえた友情を育んでいる。（右写真：留学の記念に贈られた浴衣を着る韓国人留学生と、チマチョゴリを着る日本人学生）



人文学部助教授 林 夏生

人文学部への期待

前富山大学長 瀧澤

弘(5回独)



昨年十月、富山大学は富山医科薬科大学・高岡短期大学との再編統合によって、あたらしい富山大学として再出発しました。英語表記はToyama UniversityからUniversity of Toyamaへ変わりました。名称についても、大学間で議論があり「日本海大学」や「富山高峰大学」などいろいろな提案がありましたが、最終的に常識的な「富山大学」に決まりました。しかし富山医科薬科大学にとっては、やはり創立以来続いた名称が消えるのは学生教職員はじめ、卒業生にとっても淋しいことだったとおもいます。もとより大学の統合は、企業や町村の合併と違って、理念的には二大学・一

短大が対等の立場で統合したものです。このような再編統合は全国でも初めてのケースでした。特に高岡短大の芸術文化学部への昇格や教育学部の人間発達学部への改組などは五福キャンパスの各学部の協力あって初めて実現したものです。統合によって、基礎から応用分野に跨る名実共に真の総合大学となった利点は非常に大きなものがあります。本年四月には、統合を前提に文部科学省に要求していた自然科学系大学院では、博士課程に新しく生命融合科学教育部が新設されたほか、いわゆる大学院部局化が認められ、大学の教育研究体制は大きく発展することになりました。まことに慶賀にたえません。若干残された問題として、例えば教養教育がほぼ従来どおり各キャンパスで実施されていますが、これも将来、抜本的な見直しが期待されています。

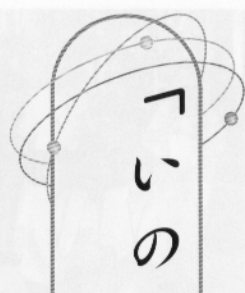
しかし、新しい富山大学の発足は順風満帆に進んだのではなく、当然ながら一部には強い抵抗もあり、また統合に際しての条件として出された無理難題も少なからずありました。これらは将来、大学の「正史」には載らないかも知れませんが、統合に至るまでの膨大な資料や会議録の中には、富山大学の発展にとって、忘れてはならない重要な点もありました。そのうち一つだけ紹介しましょう。

今、大学には、教育・研究のほかに、地域社会への貢献や産業界との連携協力が強く求められています。国立大学の法人化のもとで、基礎的研究費が大幅に削減され、科学研究費補助金の獲得や経済・産業界からの研究費導入が焦眉の急となっています。こうした雰囲気の中で、外部資金調達が困難な、或いは無縁の学部は財政面から、将来全学の発展の障害になるという主張や、基礎的学問分野を担当する学部は地方国立大学には不要であるとの主張がなされました。関連して、実務教育重視の立場から短大の「準学士」制度を五福キャンパスの全学部への導入が統合の条件であるなどの暴論も出されるなど、テーブルを叩きながら激論を交えた場面も多かったのです。「基礎的研究分野を大切にしない総合大学」は言葉の矛盾です。

さて、富山大学発足時、文学部文学科は、学生定員四十名、哲・史・文の「ミニ文学部」でした。大きく発展した現在の人文学部は人文系の広い学問分野を擁し、多くの研究者の指導のもとで学生達が生き生きと専攻分野の調査などに取り組んでいます。

確かに喜ぶべき状況ですが、しかし、気になる面が無いではありません。それは一部の優秀な学生の中にも、地道な苦しい基礎分野の勉学を回避して、狭い専攻分野で教員の研究に協力することで「研究に従事している」と錯覚している学生がいるのではないかと感がある事では。総合大学の中で基礎的学問分野を担う人文学部では、専門知識と共に、基礎的な学力を身につけ、広い視野と豊かな人間性を持ち、社会の変動や歪みに対して、総合的判断能力を持った学生が育つことを心から期待するからです。

先日、当地の新聞で人文学部の濱谷由里先生が「わが心の一冊」として、浅田次郎著「蒼穹の昴」についてお書きになったのを読みました。熱の入った解説と共に、先生の言葉として「十年前の私は、地道な基礎研究から逃げてごく狭い範囲で業績を挙げ、学会で早く認められたいとあせっていた。だがこの作品に出会ってそれが誤りであったと気づき、広く深い歴史観を体得すべく努力した。」濱谷由里先生にはお会いしたことはありませんが、すでに学会で高い評価を受け、多くの業績を挙げておいでになる先生の言葉として、大きな感銘を受けました。濱谷先生にかぎらず、このような多くの先生方の薫陶を受けた学生が社会で活躍してくれるのを心から期待する次第です。



「いのち」を学ぶ知恵

米原 寛 (14回史)



ある日の通勤途上、ラジオからこんな歌が流れてきた。聴くともなく聞いていると、

「手のひらに太陽をかざしてごらん、僕だって、君だって、オケラだって、みんな、みんな生きている友達なんだ。」こんな素直な歌が、車の窓越しに見える立山山麓の緑と共に私を包んでくれた。まさに「命の讃歌」を味わっている気分である。このとき、ふっと、「朝顔につるべとられてもらい水」の句が連想された。そう、加賀の千代女の句である。これらの歌も、日本人の古来からの素直な自然観を端的に表現したものである。「生きとし生けるものすべて友達」であり、「いのち」は儚いからこそ

思いやりのなかで慈しまなければならぬのである。

にもかかわらず、日本人がこのような「日本人のこころ」を何時の間にか、何処かに置いてきてしまったのではないだろうか。近年、テレビやラジオをつけると、きまつて、と言っているけど、子供を巻き添えにした事件が毎日のように耳に目に飛び込んでくる。そして「またなのか」「いったいどうなっているのだろうか」という思いが胸をふたぐのである。ほとんどの日本人がである。ある人は、「かつての平安時代によく言われた末法の時代に入ったのではないか」という。少子化が問題となっているこの頃、子供達の命が次々と失われていくのは、将来を、夢を彼らに託すことが出来なくなるということである。その点では、まさしく現代は「末法の時代」と呼んで差し支えがないとも思える。

平安時代以降、日本人はこの「末法」観を知恵で乗り越えてきた。「知恵」とは「いのち」を凝視する真言・天台密教の知恵である。真言は、「いのち」を大らかに賛美し、「生きとし生けるもの」はすべて、自然が与えてくれた「いのち」によるものと考え方・思想であり、天台は、生きることは様々な現実の苦に直面するも、「力」すなわち「己の生き様を内観する」力によってこれを乗り越えていくことであるとの考え方である。殊に天台の内観思想とは、言い換えるならば「地獄の思想」である。一人一人が生きるに際してさまざまな苦に直面し、そのたびにその苦の原因を探り、己のこころのなかの、三毒、すなわち、貪・瞋・痴を認識し、はっと我に返り、気づき、そこに初めて自己以外の「他人」を意識し、思いやり、慈しみのこころを育ててきたのである。こうした日

本人の内観する勇気を梅原猛氏は「日本人の地獄の思想」と呼んだ。「いのちを大切にすること」というのは、時間とともに身につけていくという類のものではなく、絶えず、大小にかかわらず、勇気をもって自己を見つめ、その眼で他を見ることによって初めて身につくものであると先人は教えてくれる。但し先人は、殊に密教である天台・真言の道者は、山岳自然のもつ優れた力から「生きる力」を学び取ったのである。彼らの「いのちを学ぶ」場は、おおかた山岳であり、殊に立山は格好の場であった。平安末期に編まれた『梁塵秘抄』は、立山を修験の霊山の第一の山として挙げている。峨々たる峰、峻厳な岩山、身の毛もよだつ立山地獄、百花繚乱の弥陀が原など、立山は自然の霊力満載の山である。

自然が内包する「いのちを育てむ」壮大な力と無我で共生できる先人ならではのことはあるが、

古来、日本の登山は「登拝」と呼び、山の霊力、自然の大きな力を感じることが目的であったが、明治期、欧米文化の影響で山岳登山は、一時、頂上征服を目的としてスポーツ化したのが、大正期になると、再び、登山の行程（プロセス）にかつての自然と我との一体化を体感する「登拝」に価値を求めることとなった。

本県では明治以降、立山開山の伝承に因んでか、成人（十五歳）の証として立山登山をする習わしがあった。また、学童登山も大正期から始まり、昭和二十年代後半から再開された学童登山は、近年、これまで以上に盛んになってきた。

「いのちの教育」が叫ばれる今日、将来を託す子供達にもっとも立山登山を勧めたい。そして、子供たちに望むことは、単に「わあ、きれい」の山を楽しむだけではなく、先人がこの山から「生きる力」を学んできたことを知り、自然の中にある自分を思いっきり感じてほしいものである。そのためにはあらまほしきものは良き指導者ではないだろうか。



愛・地球博

「瀬戸愛知県館」に勤務して

佐竹 まり子 (25回国)

私が富山大学を卒業して愛知県に来てから、もう三十年近くになります。現在は専門学校で中国語の講師をしています。私は国文専攻でしたが、在学中に中国文学科が独立し、私が三年生になる折、三宅政美先生が赴任されました。私は先生の中国文学中等の授業を通して、中国文学や中国語に興味を持ちました。また、先生のお宅での餃子パーティなども今は忘れられない学生時代の思い出になっています。

大学卒業後、愛知県で教職につきましたが、数年でやめ、また中国語の勉強を始めました。中国語の通訳の仕事をしたと思ったからです。そして、去年夢がかない、愛・地球博の瀬戸愛知県館という県のパビリオンで通訳兼事務という仕事をする事ができました。

愛・地球博のテーマは「自然の睿智」でした。会場は当初、愛知県瀬戸市の南東部に広がる里山「海上の森」を切り開いて建設される予定でしたが、自然保護団体の反対があり、長久手会場(トヨタなどの企業館・外国館があった)と瀬戸会場(瀬戸愛知県館・日本館・市民パビリオンのみ)と二つの会場に分けられ、両会場をゴンドラと燃料電池バスが結んでいました。私が勤めた瀬戸愛知県館は、「海上の森」の入り口にあり、設計も建設も細心の環境配慮工事が行なわれました。実際「海上の森」の周辺には、オオタカ、ムササビ、蜚など住んでいます。そして瀬戸愛知県館にはムササビが入って来られる穴があけてありました。ある日、館のイベントとして折り紙教室が開かれ、その手伝いをしていとお客様の歓声が聞こえました。声の方に目をやると、ムササビが館内に移植されたコナラの木をするすると下りて来るのが目に入りました。あの時の感動は忘れられません。コナラの木は会場建設のため伐採される運命にあった木でしたが、建築家や樹木医の先生の苦心と努力のおかげで、無事に館内に移植され万博終了後の今でも元気に育っています。

このように従来の万博のイメージと異なる、自然と共存したパビリオンに勤め、それを中国の人に紹介できたことは大変幸福でした。瀬戸愛知県館は、今年九月、里山を学ぶための拠点施設として再びオープンします。



七タのイベント職員の方達と(前列左端筆者)

平成十六年に西村隆先生が大阪教育大学へ転出されましたが、昨年十月には、三大学統合に伴って高岡短期大学から村上恭子先生を、また、四月からはウイリアム・ホールデン先生を北陸大学からお迎



研究室 英米言語

文化コース

教授 大工原 ちなみ

卒業生の皆様、お元気でご活躍のことと思います。人文学部は、昨年の十月から人文学科一学科の学部になりました。それに伴って従来の、イギリス・アメリカ言語文化コースという二コース制から、英米言語文化コースに変わりました。とはいえ従来のから、両コースの区別はなく自由英米の文学や文化、英語学について学んできたわけですから、影響は殆どありません。また、毎年三十名近い学生が在籍し、変わらぬ人気を保ち続けておりますので安心ください。最近では編入学の学生も増えています。

十一年ほど前までの卒業生は中・高の教員になる人がほとんどでしたが、採用試験が難関なこともあってか、一般企業や公務員になる人が多いようです。また卒論も文学作品だけでなく映画や文化研究を題材にする学生も増えてきました。これも時代の流れではないでしょうか。卒業生の皆様からの懐かしいお便りや叱咤激励をお待ちしております。



私は本名で生き、

本名で逝きたいのですが

塚本協子 (6回史)



誰でも《氏名の変更を強制されないこと》氏名権》を求める権利があるのに、私は一九六〇年から、姓でスチャモチャしている。民法七五〇条夫婦同姓規制（世界では日本だけ、九八%の妻が改姓。一九四七年新民法改正当時から問題視された）で、君（夫）は出自の姓を変えなかった。私も変えなかったら良かった。君は四人兄弟の長男だった。私は、一人娘で女なのに「あんなま」と呼ばれて育った。

結婚するまで、親同士の話し合いが長引いた。「姓はどちらを名乗る」「嫁か、婿か」「結納を受ける、受けない」などなど。長男と一人娘の結婚だからその難しかったこと。

夫婦別姓で結婚した。最初の子が私の姓。婚外子にしないためと、★民法九〇〇条四一項婚外子差別・民法改正点 私姓にするために、君を戸籍筆頭者にする婚姻届を出して、嫡出子

としたあと、ペーパー離婚し、家裁の許可を得て、塚本協子と塚本姓の子の戸籍を作った。一九七三年最後の婚姻届を出して、私は君の姓となった。後の二人の子は君と同姓。

勤務先では、「小島」と呼ばれると、私が悲しい顔をするので、塚本の「本」をとって「モツちゃん」とあだ名がついた。私は、モツモツに肥えている上に、モタモタのモツちゃんでもあった。小、中、高の同窓会名簿はいつの間にか、「小島」になっていた。生徒から「小島先生」と呼ばれると私のアイデンティティが脅かされた。五十歳で教師を辞めた。

これで、「小島」姓ともお別れと思った。私は近所・親戚では、塚本であった。君はいつも「小島」だった。

当時、私の周りに別姓の人は居なかった。二〇〇二年「選択的夫婦別姓の会・富山」で初めて通称（旧姓）使用を知った。国も県も通称（旧姓）使用を認めていた。結婚四十年目に多くの通称（旧姓）使用・事実婚・同棲の方々と知り合った。

君の父は九十四歳で逝去。一九四七年憲法二十四条と民法七五〇条で崩壊したはずの、明治民法の「家父長制度」の典型家族だった。頭の上に「家」が無くなった。

私は君にペーパー離婚を求めた。返事なく。

私は戸籍名ではなく私の本名で生き、死にたいだけである。

まず、一九九六年からの選択的夫婦別姓制の実現を願う。

いずれにしても、別姓の伴侶として、姓の葛藤のない僅かな余命を仲良く枯れるように終わりたい。

一九六〇年代から世界の国々のように選択的夫婦別姓制になつていれば、多くの女性たちは、苦しみから救われたのに。

研究室 朝鮮言語

から 文化コース

教授 藤本幸夫

皆さんお変わりありませんか。朝文が昭和五十三年十月に開設されてから、既に二十七年が過ぎました。私はその三月に梶井陟先生と共に赴任しました。当初は専攻生が二名・一名・〇名などでしたが、その後は大体三・五名程度の専攻者があり、ある年には十名を超したこともありました。近年三学年から入る編入制度が生じてからは、他大学からの入学者もあり、以前より大所帯になりました。卒業生は百十名程になります。数名の退学者を出したのは、誠に残念で、いつも申し訳なく思っています。



以前は学部の御配慮の下に会話の韓国人教師の方二名の外に、日本人講師の方を三・四名お招きしたこともありましたが。専門は諸分野に亘り、いずれも日本の朝鮮学を担う方々でした。最近財政状況の逼迫により、日本人講師はお運びいただけなくなり、実に残念です。

朝文にとって大痛恨事は、コース運営も軌道に乗った昭和六十二年九月九日梶井先生を病患で失ったことです。永年をかけて蒐集された蔵書は御遺族の御厚意で大学に寄贈され、学生諸君の協力の下に目録もできています。平成二年四月至四年九月に油谷幸利氏、同年十月至同十一年三月に岸田文隆氏、同年四月至現在に和田とも美氏が赴任しました。今、油谷氏は同志社大学、岸田氏は大阪外国語大学におり、学界で活躍しています。藤本は来春定年を迎えることとなりますが、皆さんの永年に亘るご厚誼に感謝し、朝文の発展を祈念して止みます。

ちがう畑でも

大野 一美 (41回国)

突然ですが、皆さんは「このゆびとまれ」を知っていますか？家に介護の必要なお年寄りがいらつしやる方や障害をお持ちの家族がいらつしやる方などは、一度は耳にしたことがあるかもしれません。



お年寄りと子供と...

「このゆび」はお年寄り、子ども、障害のある人もない人も介護やお世話をする人なら誰でも預かるデイサービスです。平成五年に行政からの後押しも何もなく始まった小さな活動は、今や福祉の世界では知らない人がいない「富山型デイ」

の生みの親と呼ばれています。

私は人文学部卒業生でありながら、畑違いの福祉の現場「このゆび」で仕事をしています。教員を目指して入学したものの学生時代の不勉強がたたなり、採用試験にはなかなか通らず、講師として養護学校へ赴いたのが福祉の畑への入口でした。養護学校教諭の免許状を取得し、叔母である「このゆび」の惣万理事長に声をかけられ、バイト感覚でお手伝いに行ったのが、今ではすっかり居ついてしまいました。

畑違いと言えは「このゆび」には同じ富大出身の職員が四人いますが、内三人は工学部なので、彼らもかなり畑違いの職に就いたことになるんでしょうね。「このゆび」では毎日いろんな方との出会いがあります。利用されるお客様はもちろん、元祖「富山型」として全国のあちこちから見学、研修、ボランティアと本当にいろんな方が来

られます（先日は秋篠宮もおいでに!!）。こんなに多種多様な人が出入りする所は福祉畑の中でも異色かもしれません。そして、このたくさんの方との出会いこそが「このゆび」の財産でも魅力でもあるのだろーなと思います。福祉の仕事という人のお世話をしてエライとか大変だと思

われることが多いのですが、私の場合いろいろな人との出会いを通して元気づけられたり励まされたり、こちらの方がお世話されているのかもしれない。「このゆび」とは畑違いの職場ではありますが、これからは人との出会いを大切にこの畑を耕していきたいと思います。

「話の」アツキナ

河合 利志子 (28回国)



先日、父に付き添って床屋に行った。ハケ月の赤ちゃんがこちらを見つめて「あ、あー」と話しかけてくる。目と目で語り合う。何とも懐かしく幸せな気分。大人同士では味わえない。とある研修会で、「聾学校でしょ？」と声をかけられた。相手の顔から視線をそらすことなく話す様子が分かるのだそうだ。聾学校に赴任して三年くらいのこと

だったと記憶している。聾学校勤務が長くなった今、聴覚障害者を取り巻くコミュニケーション手段について少し述べたい。十年くらい前に「星の金貨」というドラマがヒットした。聴覚に障害のある主人公が、恋人と流暢な(?)手話で気持ちを通い合おうとするシーンが覚えている方もあるだろう。これがきっかけでちょっとした手話ブームが起こり、「聴覚障害者」手話というイメージが一人歩き出した。折しも「バリアフリー」「共生」という考えが広がりを見せた頃で、学校にも交流の申込が舞い込んだ。「手話を勉強したの

で会話してみたい」と。ところが、学校は「※聴覚口話法」を基本としていて、生徒達は手話を知らない。少々後味の悪い交流もあったが、話をしたいと思っている中学生の存在は、生徒達の自己肯定感に大きくプラスになった。しばらくして、学校では、聴覚口話法と併用する形で手話が入れられることになった。

最近、大きな催しには手話通訳がつくことが増えた。手話のできる方がいる役所や病院も増えている。本当にありがたい。しかし、聴覚障害者が一番望むことは「楽しいおしゃべり」。手話が分からない、挨拶はできて話が続かない、という声が聞こえてきそう。大丈夫。「聴覚障害者」手話ではない。笑顔で「こんにちわ」と表したら、あとは恥ずかしがらずに顔を見て、少し口形に気をつけて話してみてもいい。身振りもいい。掌や紙に書くのもいい。話したいという気持ちこそが、楽しいコミュニケーションには欠かせないのだから。

※補聴器で残存聴力を活用し、相手の口の動きを読み取る方法。

燕尾服に憧れて

土井 奏

(43回哲)

大学三年の頃、将来について初めて本気で悩んだ。当時自分は何事に対しても中途半端だったように思う。子供の頃からヴァイオリンを習い、大学でも管弦楽団に所属した。音楽に打ち込む事で、人生に対する漠然とした不安から逃れていたのか、とても居心地が良く、出来る事ならずと楽器を弾いていた！と思っていた。ただ、周

ンサートマスターね」と約束し、実現した。事故から一月程経ったある日、「音楽をやりたいのなら、中途半端じゃない方法でプロを目指してほしい」と彼が言っていた事を知り、涙した。彼は私の本心を知っていて、背中を押そうとしていたのだ。この事がきっかけで、私は四年の夏に音楽大学への道を選択する。

それから半年はとんでもなかった。父親からは富大を卒業し、公立芸大に入学するという条件が出た。今までのツケが回り、足りない単位、メ切的迫る卒業、人生一度目のセンター試験、更に入試には専攻楽器の他にピアノや楽典、ソルフージュ等が課せられた。ヴァイオリンの他はすべて半年間の付け焼き刃。東京にレッスンを受けに行ったり、大学の講義の合間にピアノやソルフージュのレッスンをした。だが決断出来ない時期の苦しみは比べる何とでもなかった。悩んだり苦しんだりする時間



すら無かったのかも知れない。何とか卒業し、愛知県立芸術大学に入学した。卒業後セントラル愛知交響楽団を経て、現在は財団法人札幌交響楽団でヴァイオリン奏者として働いている。燕尾服「子供の頃から演奏会にもよく行き、TVでも観た。みな尻尾の付いた服を着ていて、それがとても格好良く、私にとってプロ演奏家の象徴だった。今まではそれが仕事着になったわけだが、着る度にあの青春時代の苦悩やワクワクを思い出す。

追悼 浅井亨先生、あなたの志はいつまでも

呉人 恵



二〇〇六年
二月二十五
日、本学部言
語学コース元

主任教授の浅井亨先生がご逝去なされた。三年ほど前から体調を崩され、入院を繰り返しておられたことは知っていたが、それにしてもその日はあまりに突然に訪れてしまった。

浅井先生の追悼文をどのように書くか思いあぐねて改めて、いかに自分が先生について

わかっていなかったかを感じ知らされている。私は一九九四年十一月に北海道大学から、当時、先生が主任教授を勤めておられた言語学コースに転任した。そして、先生はその後一九九六年三月に退官された。一年半というの、一人の人間を十分に理解するには短すぎる。

しかし、その一方で、浅井先生はおそらく何十年つきあっても、そのすべてを理解できたとは到底いえない大きな人生を生

きた方なのだという思いも強い。その型破りさは、先生が初代助手であった北大の言語学研究室で、私もまた助手として勤めていた時にも、「伝説」として語り継がれていた。

アイヌ語学者であり、医師であり、老人ホームの園長であったその豊かな足跡は、シベリアの消えゆく言語の記述にしがみついているしか能のない私になど理解できようはずもない。しかし、ひとつだけいえることは、言語学者としてアイヌ語の研究と教育に情熱を注がれたことも、医師として病める人々の治

療にあたられたことも、そして老人ホームで老人介護に取り組まれたことも、敬虔なクリスチャンであられた先生の人間に対する深い愛と奉仕の精神に裏打ちされていたということである。

二〇〇一年三月三日に、言語学の同窓生が開いた浅井先生古希のお祝いの時のことが、改めて思い出される。当の浅井先生はなぜか一時間半も大遅刻をされたのだが、同窓生たちはそんな先生のおおらかさには慣れっ

浅井先生、先生が残して行ってくださった、互いの領域を犯さず、なおかつ、和気藹々として暖かな学びの空気が、退官されて久しい今でも我が言語学コースには漂っています。微力ながら、あなたの志を受け継いでいき



2001年3月3日 言語学コース同窓生による浅井亨先生古希のお祝い (前列右から4番目が浅井亨先生)

総会のご案内

謹啓 秋涼の季節となりました。皆様にはご清
祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も下記の要領で総会・講演並びに
懇親会を開催いたします。多数ご参加いただきた
くご案内申し上げます。 敬 白

人文学部同窓会長 松平 義磨
記

日 時：11月11日(土) 午後1時30分より

場 所：ボルファートとやま

(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講 演

講 師：林 夏生 助教授

(国際関係論／比較社会論)

演 題：『韓流』の向こう側

一日韓交流、何が変わったか

冬ソナ、ヨン様……日本が空前の「韓流」ブームに沸
いていた頃、韓国では長年にわたり禁止されていた日本
の歌謡曲CD販売やドラマの放映が、はじめて公式に許
可された。しかし、靖国問題や竹島領有権問題など、こ
とあるごとに韓国での「反日」や日本での「嫌韓」の動
きがクローズアップされ報道されるのも事実である。い
まや毎日平均1万人以上が国境を越えて往来するよう
になった、日本と韓国。この両国間の交流は、今どう変
わろうとしているのか、またそれはなぜなのか。交流の
現場からの映像レポートなどを交えつつ、報告する。

懇親会：午後4時より

会 費：5,000円(当日受付にてお納め下さい)

同封のはがき(現況通知・総会・懇親会出欠な
どの回答)を10月27日(金)までに是非ご返送願ひ
ます。

「富山大学同窓会 連合会」(仮称)の 設立検討会開催

昨年十月、大学が再編・統合
して、八学部からなる新富山大
学が誕生したことを受けて、こ
の機にそれぞれの学部の同窓会
の連合会を設立しようとの機運
が出て来ました。

去る七月二十五日、各同窓会
の代表並びに大学当局の学長、
副学長が出席して、第一回目の
設立検討会がもたれました。
大学側からは新大学の現状説

明があり、各同窓会からはそれ
ぞれの実情と課題を出し合い、
情報交換を行いました。

連合会設立の目的として、「富
山大学の学部別同窓会及び同窓
会支部間の交流・連携を推進す
ることにより、卒業生の交流・
親睦と富山大学の発展に寄与す
る」との案も提出されましたが、
事業内容はか具体については、
引き続き検討を重ねることとな
りました。

「富山大学出版会」 の誕生

この度の三大学の統合で、新

「富山大学」は総合大学として
新たに発売しました。魅力的で
開かれた大学が求められる中で
教育・研究成果を集積し、広く
発信して学術的、文化的使命を
果たすべく「富山大学出版会」
が設立されました。

今後、出版活動を通して地域
社会や研究者・研究機関からの
期待に応え、発展していくこと
をわが同窓会としても願ってお
りますが、この会報にも、この
出版会のみならず、人文学部教
官の刊行案内等をお知らせして
いく予定にしています。

新 刊案内

(富山大学中央図書館情報より)

- 幻影のローマ「伝統」の継承と
イメージの変容／歴史学研究会編
小林 功著(青木書店)
- 鷗外女性論集
森 鷗外著 金子幸代編・解説(不二出版)
- 黒船と二ッポン開国
神徳昭甫著(富山大学出版会)

栗林さん36回・文 「太宰治賞」を受賞

本年度の第二十二回「太宰治
賞」に人文学部文化人類学科三
十六回卒業の栗林佐知さんが決
まりました。

受賞作品「峠の春は」は「太
宰治賞二〇〇六」というムック
にまとめられ、筑摩書房から刊
行されています。

栗林さんはこれまでも「小
説現代」新人賞も受けており、
今後が期待されます。

「年会費」報告

本年度の年会費納入状況をお
知らせします。

平成十七年十月より平成十八
年六月七日まで四三二名(終身
会費二八名、年会費四〇三名)
の方々から、合計六十八万八千
円の年会費を納入いただきまし
た。ご協力厚く御礼申し上げます。

一 訃 報

謹んでご冥福をお祈り致します

早川 明(哲学4)	平成15年5月
江守 修明(英文1)	平成16年
山田 昭夫(哲学7)	平成17年1月14日
高野 彰(史学7)	平成17年10月27日
江本 陽子(日本書紀48)	平成17年12月27日
浅井 享(言語教育)	平成18年2月25日
藏堀 正雄(国分6)	平成18年5月29日

● 編集委員 ●

稲垣 栄子 久保 尚文
志麻 愛子 仙石 敬子
田中 史子 山藤 登

